

# 紀 要

## 第 2 号

---

### 目 次

1. 近江の地域色の再検討 2  
— 周辺地域における近江系土器について — (小竹森直子)
  2. 「倉橋部廃寺」雑考 (田路正幸)
  3. 八島瓦窯 — 瓦の需給関係と工人の動向 — (北村圭弘・三辻利一)
  4. 近江国庁再考 (平井美典)
  5. 条里遺構の調査と現状 (宮崎幹也)
  6. 日野川中流域における条里と集落 (岡本武憲)
  7. 滋賀県下における掘立柱建物集落の成立契機について (大崎哲人)
  8. 妙楽寺遺跡出土の呪符木簡について (葛野泰樹)
- 

1989. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

# 1. 近江の地域色の再検討 2

## — 周辺地域における近江系土器について —

小竹森 直 子

### 1. はじめに

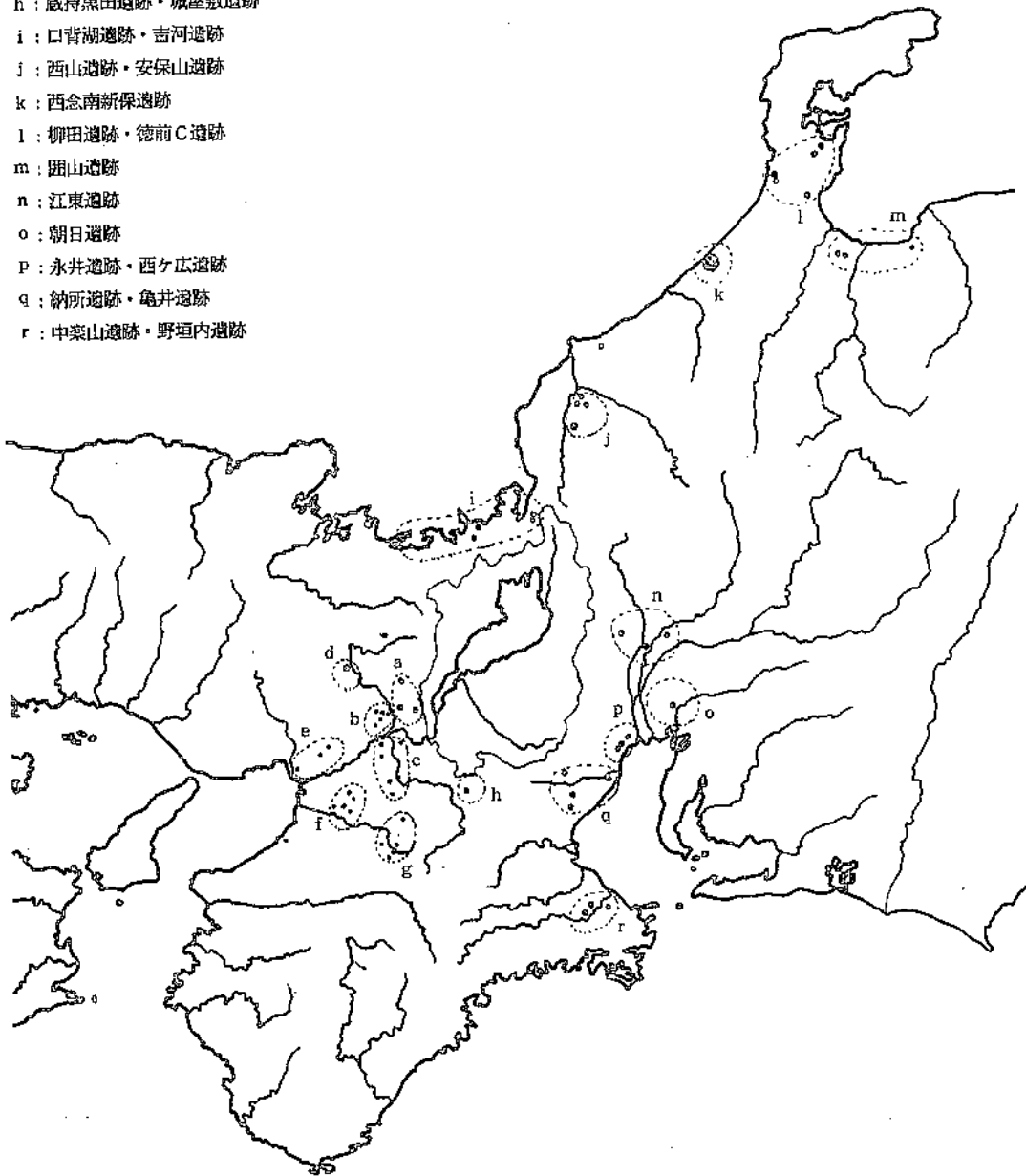
日本最大の淡水湖である琵琶湖を中心とする近江は、周囲を2000m級の山地に囲まれた極めて完結した地域である。にもかかわらず、特に弥生時代の土器様相に対しての明瞭な一定見解を得られていない地域でもある。弥生時代後期に限ってみても、極めて特徴的な受口状口縁甕形土器・鉢形土器を有しながらこの様な状態にあるのは、琵琶湖を中心としてドーナツ状に連なる湖北・湖東・湖南・湖西地域が、河川・内湖・小山地等によってより完結した地域を形成し、これらが各々に北陸・東海・畿内・丹波・丹後地方といった極めて特徴的で異なる土器文化を有する地方と接しているが故に、近江内の4地域が各々に異なる地域色を形成していることに要因の1つがある。とは言うものの、他地方から“近江系”として識別され得る土器群を形成した母体地域は明らかに存在し得るはずであり、その土器様相を明らかにすることが第1歩である。本文では、近年の周辺地域における近江系土器の分析をふまえつつ、近江から見た周辺地域出土の近江系土器を検討し、土器文化圏としての近江について考えてみたい。

### 2. 近江系要素と近江内における地域差の抽出

他地域において近江系として識別されているものとしては、弥生時代中・後期の甕形土器、弥生時代後期の甕形土器・鉢形土器を主として、壺形土器、手焙形土器がある。近江系には、狭義の搬入土器としての近江産と、在地胎土による在地産とに大別される。後者は更に、土器製作者の直接的移動によるものと、在地土器製作者によると想定される模倣あるいは在地土器との折衷土器に細分される。いずれにしても、近江系とは形態のみならず、文様構成・調整手法の各要素及び組合せによって判別し得るものである。ここでは、まず近江内における各要素を整理し、特に弥生時代後期において顕著となる近江内地域差の様相を概観し、後章の基礎としたい。

弥生時代前期では、古段階的形態を呈する壺形土器・鉢形土器が散見されるものの、成形手法から中段階以降本格的に波及・定着すると考えられる。いわゆる遠賀川系土器群である。新段階になると、壺形土器・鉢形土器の口縁端部を指頭で挟んで押圧を加え波状とするものが認められ、弥生時代中期初頭にも残存する。これは三重県納所遺跡・古里遺跡等伊勢湾沿岸においても、壺形土器に用いられている手法である。湖北を中心とする地域においては、大半は搬入品と考えられる条痕

- a : 中臣遺跡
- b : 中海道遺跡・森本遺跡・今里遺跡
- c : 畑ノ前遺跡・田辺天神山遺跡・六条山遺跡
- d : 北金岐遺跡
- e : 安満遺跡
- f : 美國遺跡・恩智遺跡
- g : 綴向遺跡・唐古毘遺跡
- h : 蔵持黒田遺跡・城屋敷遺跡
- i : 口背湖遺跡・吉河遺跡
- j : 西山遺跡・安保山遺跡
- k : 西念南新保遺跡
- l : 柳田遺跡・徳前C遺跡
- m : 囲山遺跡
- n : 江東遺跡
- o : 朝日遺跡
- p : 永井遺跡・西ヶ広遺跡
- q : 納所遺跡・亀井遺跡
- r : 中栗山遺跡・野垣内遺跡



第1図 関連主要遺跡分布図

文系土器が認められる。これらは突帯文系の五貫森式以降、樫王式・水神平式の深鉢形土器・壺形土器であり、水神平式の場合は県内一円に散見される。

弥生時代中期における器種構成は、広口壺形土器・細頸壺形土器・長頸壺形土器・直口短頸壺形土器・甕形土器・鉢形土器を基本とし、第Ⅲ・Ⅳ様式には、台付鉢形土器・高坏形土器・水差形土器が加わる。細頸壺形土器は、口縁部が袋状を呈するものと、受口状を呈するものがあり、器形が異なる。甕形土器は、佐原氏の分類以来近江型と称される一群を主として、従属的に畿内系が認められる。ここで壺形土器・甕形土器における各要素を抽出すると下記の様になる。

口縁部形態 - a : 受口状口縁、b : 袋状口縁、c : 山形口縁、d : 端面の拡張

文様構成 - 口縁部内外面 - a : 押圧文、b : 瘤状突起、c : 棒状浮文、d : 櫛描文 (刺突列点文、波状文)、e : 斜格子文、f : 山形文

頸部～胴部 - g : 櫛描文 (直線文・波状文・刺突列点文)、h : 斜格子文

調整手法 - a : ハケ調整、b : 粗いハケ調整

壺形土器におけるこれらの主たる組合せは、a形態+d文様・e文様・f文様+g文様・h文様+a調整、b形態+a文様・c文様・d文様+g文様+b調整である。b文様は、広口壺形土器の口縁部内面に貼り付けられる。甕形土器における主たる組合せは、a形態+d文様+g文様+b調整、c形態+d文様+g文様+b調整、d形態+a文様+d文様+g文様+b調整である。甕形土器におけるd文様は、主として口縁部内面に施され、波状文と刺突列点文による山形文が大半である。また、弥生時代中期初頭におけるd形態+a文様には、口縁部の刻目文が伴う。

	弥生後期前半		弥生後期後半		その他	その他 形態的特徴
	口縁部	胴部	口縁部	胴部		
湖北	刺突列点文	刺突列点文 直線文		カキ目状調整	脚台付き	U字形を呈する。
湖 東	刺突列点文	刺突列点文 直線文 波状文	刺突列点文 へら描沈線	刺突列点文 直線文 カキ目状調整		頸部が明瞭、頸部と立ち上がり部との間に平坦面を有する。
湖 南	刺突列点文	刺突列点文 直線文 波状文 貼付凸帯	刺突列点文 へら描沈線 棒状浮文	刺突列点文 直線文 貼付凸帯 カキ目状調整		
湖 西	刺突列点文 刻目文	刺突列点文 直線文		タタキ		内傾するもの、頸部が不明瞭でU字形を呈する。

第1表 甕形土器における小地域差対比表

各要素の系譜を追求していくと、特に伊勢湾沿岸地域との共通性が高いことがうかがわれる。弥生時代後期においては、壺形土器・甕形土器・鉢形土器における受口状口縁が定形化するが、文様構成・調整手法が弥生時代中期とは異なる。

口縁部形態 - a : 受口状口縁

底部形態 - a : 平底 (若干あげ底)、b : 脚台付

文様構成 - 口縁部外面 - d : 櫛描文 (刺突列点文)、i : ヘラ描沈線文、j : 刻目文

頸部～胴部 - g : 櫛描文 (直線文・波状文・刺突列点文)、k : 貼付突帯文

調整手法 - b : 粗いハケ調整、c : カキ目状調整、d : 内面ナデ調整、e : タタキ

壺形土器における組合せは、a形態 + d文様 + g文様 + a調整であり、g文様は、広口壺形土器・直口壺形土器にも用いられる。口縁部 a 形態の甕形土器・鉢形土器の文様構成・調整手法は、時期・地域によって大きく異なることから、他器種との関連を含めて地域毎にまとめてみる。

湖南・湖東 壺形土器・甕形土器・鉢形土器の受口状口縁は頸部が明瞭であり、内面においても頸部と立ち上がり部分との間に明瞭な平担面を有するものが主流である。文様構成は d 文様 + g 文様 + k 文様であり、胴部においては、上位から直線文 - 刺突文 - 直線文 - 波状文 - 貼付突帯を基本とする。波状文は、通有の連続する波状文とは趣きを異にし、むしろ連続円弧状文と言うべき形状を呈する。後期後半以降には d 文様が縮小化して i 文様が見られ、無文化傾向にある。g 文様も残存するものの、これの簡略化手法と考えられる c 調整が認められる。口縁部 a 形態の壺形土器・甕形土器・鉢形土器および g 文様を有する広口壺形土器以外の器種構成は、畿内第 V 様式とほぼ同じであるが、器台形土器については、口縁部を垂下させて沈線文・波状文・円形浮文等の装飾を加えるものを近江系として把える。遺跡間のばらつきはあるものの、壺形土器約 6%、甕形土器約 65%、器台形土器約 30% がいわゆる近江型である。

湖北 受口状口縁は、頸部が緩やかで U 字形を呈する。文様構成は d 文様 + g 文様であるが、刺突列点文と直線文の組合せを主流とする。後期後半には、c 調整と共に、口縁部・胴部の無文化が急速に進展するが、壺形土器においては、d 文様 + g 文様が根強く保たれている。姉川以北においては北陸系の複合口縁と近似した無文の受口状口縁甕形土器の出土量が増加すると共に、北陸系甕形土器の出土例も多く、約 15% を占める。a 形態以外の壺形土器では、櫛描文を多用する東海系が約 35% を占めている。高坏形土器においても、後半以降の欠山式・元屋敷式併行期にはそれまでの畿内系の系譜を断たせて東海系となる。器台形土器は、明瞭な屈曲部を有する X 字形が主流であり、近江系と考えているが、壺形土器・高坏形土器と同様に伊勢湾沿岸、特に美濃・尾張との共通性が高い。姉川を境にして若干比率が異なるが、各器種内に占める近江型の割合は、壺形土器約 10%、甕形土器約 50% である。

湖西 受口状口縁は、湖北と同様に頸部が緩やかで内面 U 字形を呈するものと、内傾気味のもので主流である。文様構成は d 文様・j 文様 + g 文様であり、g 文様は直線文と刺突列点文から成る。j 文様は、刻目内の痕跡からハケ状工具もしくは櫛状工具による押圧と判断されるが、刺突列

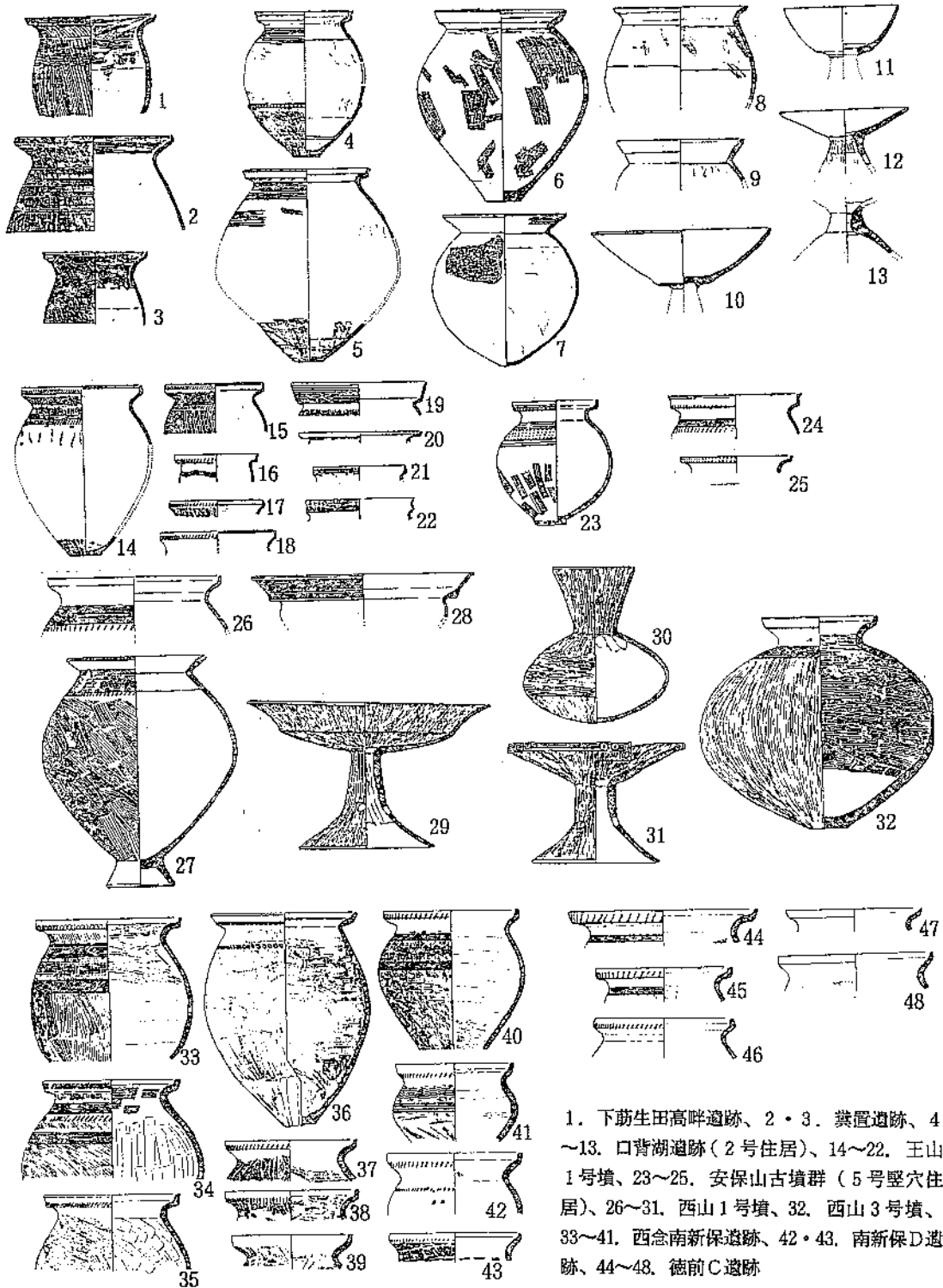
点文とは明らかに異なるものである。後期後半は無文化傾向にあると共に、a調整+e調整の甕形土器が散見される。これは遺跡間の差異が認められるが、概ね琵琶湖西岸地域において出土している。他の器種については、湖北と湖南の間間的な様相を呈しているが、弥生時代中期以来、極めて畿内の要素からなる土器群を検出する遺跡が点在していることは注目される。各器種内に占める近江型の割合は、壺形土器約10%、甕形土器約40%であり、東海系が壺形土器・高坏形土器を主として約20~30%、北陸系が甕形土器を主として約10%を占める。

### 3. 周辺地域における近江系土器の出土状況について

#### 1) 北陸地方(若狭・越前・加賀・能登・越中)

若狭では、大飯町寺内川遺跡以外は、三方湖東辺から立石岬にかけて位置する遺跡において検出されている。三方町松尾谷遺跡では第IV様式の甕形土器の出土例があるが、他は弥生時代後期~庄内期のものである。美浜町口背湖遺跡の竪穴住居から、受口状口縁甕形土器が3点出土している。図示された甕形土器5点のうち2点がくの字状口縁、3点が受口状口縁である。うち2点は胴部に直線文・貼付突帯文を有しており、形態的にも湖南型と言える。残る1点は、胴部内外面ハケ調整で、無文の受口状口縁を有するものであり、在産と考えられる。寺内川遺跡では、湖西型の甕形土器と共に、湖南で特徴的な器台形土器が1点出土している。他は甕形土器であり、概ね湖西型である。

越前では、敦賀平野と福井平野を流れる日野川・足羽川流域において検出されている。敦賀平野の吉河遺跡、足羽川流域の下筋生田高畔遺跡・<sup>(ウツ)</sup>糞置遺跡からは概ね第III様式以降の甕形土器(a形態・c形態+d文様+g文様+b調整)が出土しているが、遺跡数・出土量が増加するのは、弥生時代後期後半以降である。溝・包含層からの出土例では、甕形土器が主であり、鉢形土器・壺形土器が若干ふくまれる。概ね湖西・湖北型であるが、敦賀市中遺跡では、形態的・技法的には在地のものでありながら、口縁頸部に刻目文を加え脚台をつけた折衷形態の甕形土器が認められる。吉河遺跡では、第III・IV様式の方形周溝墓及び後期にかけての竪穴住居から共に甕形土器が出土している。また、鯖江市西山古墳群・王山古墳群・福井市安保山古墳群といった弥生墳墓群からは、甕形土器・鉢形土器・壺形土器が出土している。安保山古墳群内の竪穴住居では、9点中壺形土器・甕形土器・鉢形土器の3点が近江系であり、西山1号墳周溝内出土の一群では、擬凹線を持つ複合口縁鉢形土器1点以外は、在地的要素を有していない。甕形土器2点中1点は、無文の受口状口縁を有し、他1点はくの字状口縁ではあるが、胴部にg文様を施した底部b形態のものであり、むしろ東海系に近い。器台形土器は筒部の上下方を明瞭な屈曲を有してX字状にひろげ、受部端部に直線文・円形浮文を加飾するものであり、これとセット関係にある細頸長頸壺形土器の形態および高坏形土器から甕形土器と共に湖北型の組合せである。また、西山3号墳周溝内出土の壺形土器は、近江内における周溝墓出土例と同じくする。以上の様に、越前においては、集落のみならずこれらと結びつく墳墓からセット関係を持って出土している。



第2図 若狭・越前・加賀・能登出土例

加賀では金沢平野、能登では邑知瀨から七尾湾にかけて能登半島を分断する羽咋川 - 大谷川流域において検出される。いずれも弥生時代後期後半から布留期にかけての甕形土器である。加賀では極めて密集して近江系土器を出土する遺跡が存在しているが、その中でも入り方に差異が認められる。近江系土器が全体の1%以下であるのが通有であるとする、金沢市西念南新保遺跡では、近江系が甕形土器の約20%を占めているのをはじめとして、鉢形土器・器台形土器にも近江系が認められる。形態・文様構成は湖北型を基本とし、特に無文のものについては伊香郡高月町坂口遺跡で主流である形態と共通性が高い。しかしながら、内面ヘラケズリ、外面ハケ調整との組合せは在地化した形態で存在していることを示しており、若狭・越前とは様相が若干異なっている。また、近江系土器と共に東海系の壺形土器・高環形土器が稀少ながら伴って検出されていることは留意される。

越中においても、甕形土器が稀少ながら認められるが、加賀からの波及による要因が大きいと考えられる。

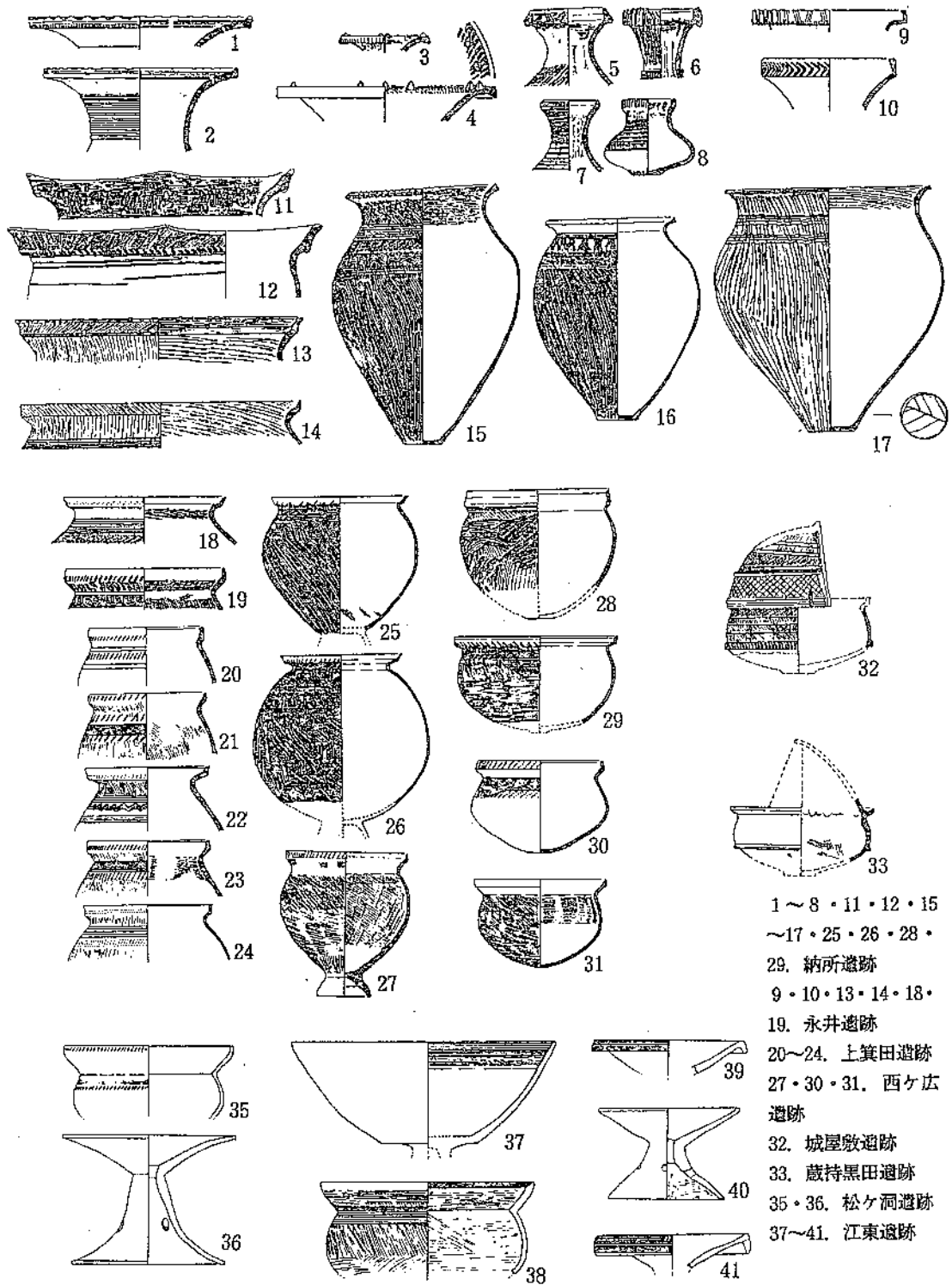
## 2) 東海(美濃・尾張・伊勢・伊賀)

美濃は、資料が乏しいため不明瞭な点が多いが、近江との共通要素をいくつか見出すことができる。採集資料ではあるが古墳時代初頭の様相を大まかに反映していると考えられる岐阜市江東遺跡出土の土器群を例にすると、鉢形土器は明瞭な受口状口縁を呈しないものの、8文様を施すこと、これとセット関係にある器台形土器は湖北において通有の形態であること、高環形土器内面に直線文帯を有する点で湖北と共通であることがあげられる。甕形土器・壺形土器についても湖北との関連は強いと想定されるが、今後の資料増加に期待せざるを得ない。

尾張では、朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡において弥生時代中期のc形態の甕形土器が出土している。口縁内外面へのd文様は稀少であり、頸部および口縁上端部に刻目文を施す。調整はb調整であるが、近江よりは伊勢においてその類例が認められるものである。弥生時代中期における受口状口縁壺形土器は、形態的にも縦位櫛描文等の文様構成においても貝田町式との共通性が高い。弥生時代後期山中期以降においては、鉢形土器を主として甕形土器・器台形土器が各遺跡で認められる。鉢形土器・甕形土器の文様構成・施文部位等から湖北型を基本としているが、口縁部形態の変異は著しい。甕形土器は、S字状口縁甕形土器の成立・発展と共に出土例が減少するが、受口系鉢形土器とX字形器台形土器のセット関係は保たれている。尾張と近江、特に湖北・湖東との土器様相は弥生時代中期以降、共通性の高いものである。弥生時代中期においては受口状口縁系の細頸壺形土器、弥生時代後期においては各々に甕形土器は在地型であるが、鉢形土器・甕形土器・器台形土器は近江からの影響、壺形土器については相互補完的であり、弥生時代後期終末～古墳時代初頭においては、湖西・湖北の高環形土器が欠山式・元屋敷式類似形態となることによって、より近似化が認められる。

伊勢は、伊勢湾西岸沿に北から伊勢平野北部の四日市市周辺・中央部の津市周辺・志摩半島の宮川流域において検出されている。四日市市永井遺跡・西ヶ広遺跡・東日野遺跡では、弥生時代中期





- 1 ~ 8 · 11 · 12 · 15  
 ~17 · 25 · 26 · 28 ·  
 29. 納所遺跡  
 9 · 10 · 13 · 14 · 18 ·  
 19. 永井遺跡  
 20~24. 上箕田遺跡  
 27 · 30 · 31. 西ヶ広  
 遺跡  
 32. 城屋敷遺跡  
 33. 蔵持黒田遺跡  
 35 · 36. 松ヶ洞遺跡  
 37~41. 江東遺跡

第4図 伊勢・美濃出土例

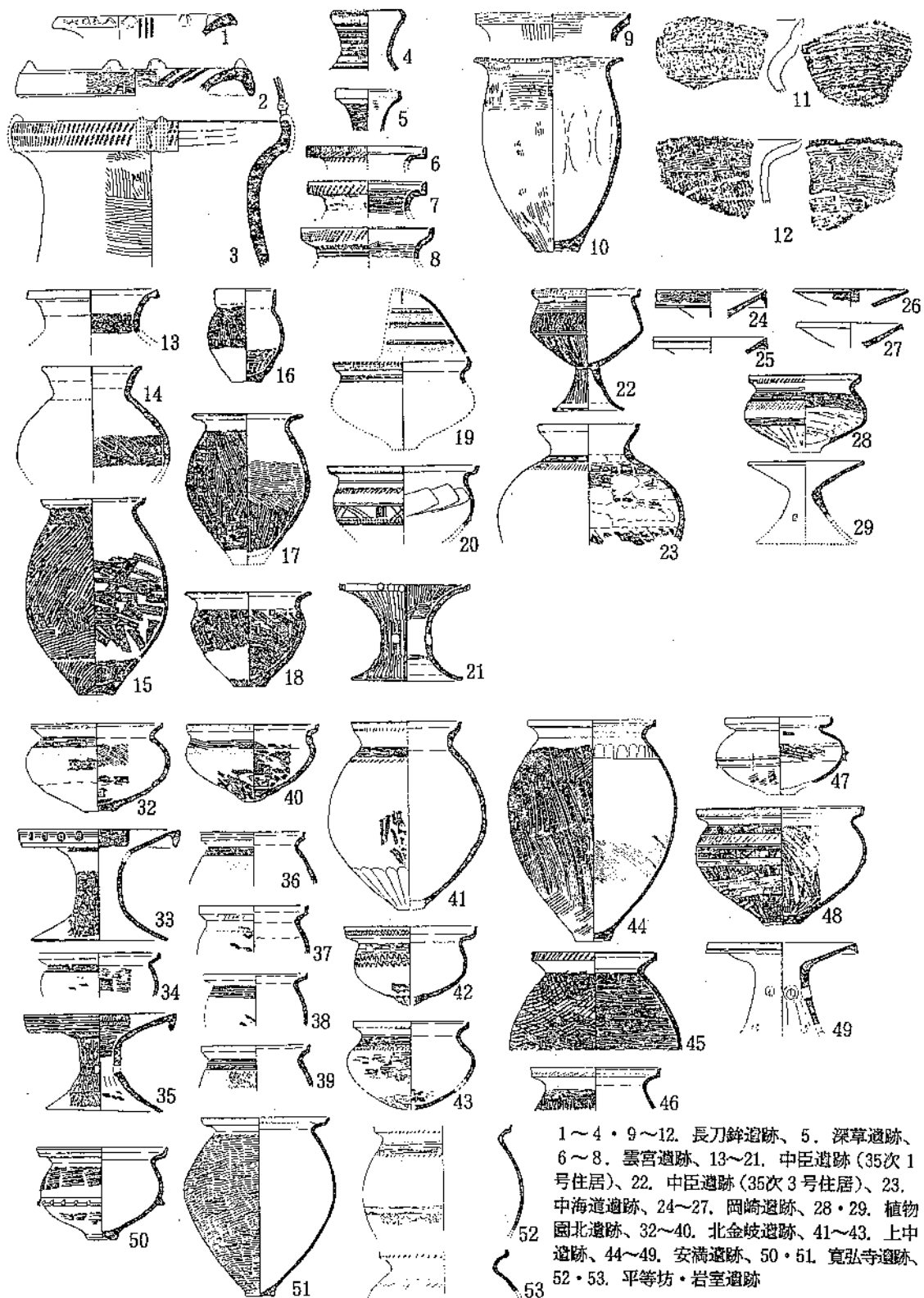
初頭以降、各時期の遺構から壺形土器・甕形土器・鉢形土器・器台形土器が出土している。永井遺跡では、第IV様式の方形周溝墓から壺形土器・甕形土器が出土している。a形態+d文様・c文様+g文様、広口壺形土器におけるb文様・d文様+g文様は、近江における組合せと同じである。亀山市地藏僧遺跡・鈴鹿市起A遺跡・同東庄内B遺跡出土のa形態壺形土器を見ると、b・c・g文様と同時にe・f・h文様との共通性が留意される。e・f・h文様は、壺形土器においては日野川流域、甕形土器においては葉山川流域において顕著に認められる要素であり、湖東と伊勢西北部との関連性の高さを示していると言える。津市納所遺跡・亀井遺跡・上箕田遺跡では、自然流路・溝・土塋等から甕形土器・鉢形土器・壺形土器・器台形土器・手焙形土器が出土している。納所遺跡・亀井遺跡の甕形土器を見ると、口縁端面に刻目文を加え、胴部にg文様(直線文・刺突列点文・波状文)+b調整であり、特に口縁部形態および文様に差異が認められる。しかしながら連続円弧状文等施文手法における共通性は高く、壺形土器と共に湖東との関連性の高さがうかがわれる。後期における甕形土器・鉢形土器は、明瞭な湖南型と底部b形態+d文様+g文様(直線文・刺突列点文)が認められ、後者は後期における近江からの影響と弥生時代中期以降の疑似近江型甕等からの系譜が想定されると同時に、伊勢においても独自に尾張とは異なるS字状口縁への変化を追うことが可能である。宮川流域では、弥生時代後期から庄内期の方形周溝墓・竪穴住居から甕形土器を主として鉢形土器・器台形土器が出土しているが、伊勢平野北・中央部に比較すると出土量は少ない。

伊賀では、名張市下川原遺跡において土塋から第IV様式の甕形土器・壺形土器が出土しているが、城屋敷遺跡・蔵持黒田遺跡は後期～庄内期である。甕形土器・鉢形土器・手焙形土器・器台形土器が出土しているが、壺形土器・高坏形土器については畿内系である。

### 3) 畿内(淀川流域・大和・山城・丹波・丹後)

淀川右岸の摂津においては、弥生時代中期以降に近江系の要素が認められる。広口壺形土器内面にb文様を有するものが散見され、近江の様な粗いハケ調整ではないが、ヘラミガキを行わず細いハケ調整を最終調整とする地域である。甕形土器におけるc形態は現在のところ認められない。弥生時代後期では、安満遺跡のA5-2方形周溝墓、嶋上郡衙B-KH1竪穴住居等から甕形土器・鉢形土器・器台形土器が出土している。安満遺跡では、甕形土器においてドーナツ状あげ底の底部に、タタキを残存させる胴部を有し、無文の受口状口縁を持つものがあり、折衷土器的な性格を持つ土器と言える。甕形土器・鉢形土器は概ね湖西・湖南型であるが、k文様は認められない。

河内における出土器種は、手焙形土器が大半であり、甕形土器も認められる。恩智遺跡・美園遺跡出土の手焙形土器は、鉢部は明らかに受口状口縁であり、胴部下半の貼付突帯(k文様)・胴部上半の刺突列点文(g文様)等近江系要素が極めて色濃いものである。甕形土器は、馬場遺跡・馬場川遺跡の様にe調整+無文受口状口縁の組合せが多い。これに近似したものは、畿内第V様式内においても存在しており、これとの関連が考えられるが、明瞭な受口状を呈するものについては、折衷形態として近江系とする。



第3図 山城・丹波・河内・大和出土例

大和では、纏向遺跡において湖南型の甕形土器・鉢形土器が多量に出土しているのをはじめとして、甕形土器・手焙形土器が散見される。弥生時代中期における大和型甕形土器のハケ調整の多用性は、近江におけるb調整と共通すると共に、形態的にも類似点が認められる。唐古・鏡遺跡SK-106からは、壺形土器・甕形土器・鉢形土器が出土し、甕形土器・鉢形土器については湖南型と搬入品である。一方では、同遺跡SD-6、平等坊・岩室遺跡SD-01の甕形土器を見ると、内面はヘラケズリであり、在地産であると考えられる。

山城・丹波・丹後については分析が進められているのでここでは要点のみにとどめておきたい。山城には桂川・宇治川・木津川の3本の河川があり、近江・大和・摂津・丹波と連なっており、各々の流域に近江系土器を出土する遺跡が存在している。桂川流域および山科盆地の北山城においては桂川左岸の深草遺跡・鳥羽遺跡、右岸の鶏冠井遺跡・今里遺跡・中久世遺跡・森本遺跡等の中核的遺跡で第Ⅱ様式以降の壺形土器（b文様、a形態+a文様・d文様+g文様）甕形土器（a形態+d文様+g文様+b調整、c形態+d文様+g文様+b調整、c形態+d文様+g文様+b調整）が出土しており、右岸・左岸の格差は著しいものではない。弥生時代後期においては堅穴住居・土壙等から、甕形土器・鉢形土器・器台形土器を主として、壺形土器・手焙形土器が検出され、概ね湖南型である。各器種に占める近江系の割合は、遺跡間格差があるが10～20%を占め、かつほぼ主要器種がそろっていることが注目される。木津川・宇治川流域の南山城のうち、宇治川流域は稀少であり、木津川流域において断続的に大和へ遺跡が存在している。出土器種としては、甕形土器・手焙形土器に限定される傾向にある。丹波・丹後においては、弥生時代後期に集中するが、弥生時代前期以来、断続的・点的に近江系土器の出土が知られている。弥生時代前期は、丹後の峰山町扇谷遺跡・網野市離遺跡・丹波の亀岡市太田遺跡において、指頭押圧による波状口縁の壺形土器・鉢形土器および、弥生時代中期初頭のa文様+b調整の甕形土器が出土しているが、甕形土器の口縁部内面の波状文は認められない。弥生時代中期中葉～後半では、北丹波では由良川水系、南丹波では亀岡盆地で認められ、この傾向は弥生時代後期に続く。大堰川流域・由良川流域いずれにしても鉢形土器を主体としている。亀岡市比金岐遺跡では、B地区SD-01において壺形土器・甕形土器・鉢形土器・手焙形土器が出土し、各々10%前後を占めている。山城が湖南型であるのに対して、湖西型と考えられるものが存在する。このことは北桑田郡京北町上中遺跡において湖西型の鉢形土器・甕形土器が出土していることから、その経路の一端がうかがわれる。

#### 4) その他の地域

遠隔地の出土例としては、新潟県大沢遺跡、岡山県高島遺跡、同鴨遺跡、福岡県今川遺跡がある。大沢遺跡の方形周溝墓をはじめとして、甕形土器が主である。鴨遺跡では他に伊勢湾地方の土器がかなり含まれている。いずれにしても、これらは直接的な人間集団の移動・物資の移動ではなく、間接的・二次的に持ち込まれたと考えられる。

#### 4. 流通経路と近江系要素の位置付け

まず、各地域における近江系土器要素の存在意義を考える前に、単純にその搬入経路を考えてみることにする。

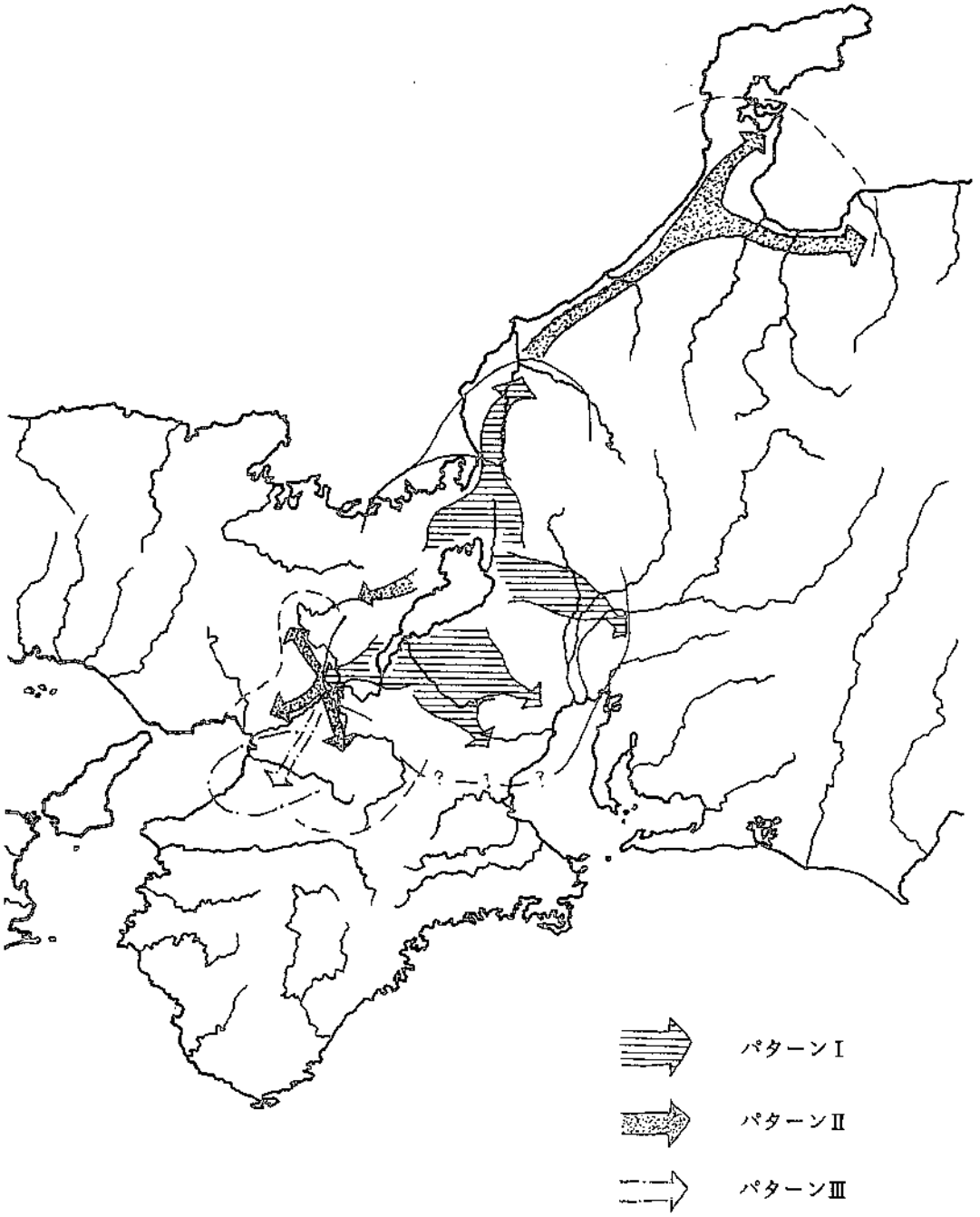
湖南・湖東の近江南部からの流出先としては、淀川水系と伊勢が考えられる。淀川水系では、高野川・宇治川・山科盆地を経て山城への拡りがまず把えられるが、瀬田川—宇治川ルートよりも、山科盆地—桂川水系のルート上に道跡が集中しており、後者のルートが最も日常的であったと想定される。山城からは、木津川流域を経由して大和へ、淀川流域を経由して摂津・河内のより西方へ波及する。内陸部である丹波・南丹後へは、山城から大堰川経由と、湖西から安曇川—弓削川—大堰川あるいは高野川からのルートが想定されるが、湖西から丹後への直接ルートは定かではない。しかしながら、弥生時代前期・中期前半期における丹後海岸沿道跡との関連は、弥生文化の北回りルートを考える上で留意しておく必要がある。伊勢へは、野洲川—伊賀盆地、野洲川—鈴鹿川、愛知川—町屋川の3ルートが想定される。野洲川上流域における状況が不明であるため山岳部にどの様に存在し、波及していったかを想定することはできないが、極めて日常的に交流があったと考えられる。

湖東・湖北の近江東部からは、天野川—関ヶ原—揖斐川を経て美濃・尾張への流出が想定される。湖北・湖西の近江東部からは、塩津街道・若狭街道によって若狭・越前に至り、海岸沿の平野部を北土したと考えられる。

主要経路に沿って東西南北いずれにもその分布が認められるわけであるが、その内容・性格は異なっている。西から見てみると、隣接する山科盆地・山城においては、弥生時代中期における壺形土器・甕形土器、弥生時代後期における壺形土器・甕形土器・鉢形土器・器台形土器・手焙形土器が、10%前後含まれる。ここから拡散する地域では、器種が限定される傾向にある。丹波・丹後では甕形土器・鉢形土器、大和では甕形土器・手焙形土器、摂津・河内では甕形土器・手焙形土器がほとんどであり、河内では甕形土器が折衷形態であると同時に手焙形土器が大半である。

北へは、若狭・越前までは壺形土器・鉢形土器・甕形土器・器台形土器が10%前後存在し、山城と近似した状況を呈しているが、加賀・能登においては甕形土器・鉢形土器に限定され、在地土器との形態的・技法的折衷形態が多く認められる。ある程度在地化していると考えられるが、全体に占める割合は1%前後と少ない。

東と南へは、弥生時代前期末以来土器組成・要素において極めて共通性が高い。弥生時代中期における壺形土器・甕形土器の受口状・袋状口縁、文様構成・調整手法は共有の要素であり、特に伊勢北部との相互関連の中でこれらの出現・分化を把えて行く必要がある。弥生時代後期においては、壺形土器・甕形土器・鉢形土器・器台形土器・手焙形土器が明瞭な地域色を形成した各々の在地土器組成の中に組み入れられており、甕形土器・鉢形土器の受口状口縁はS字状口縁に転換し、伊勢湾沿岸地域における独自の在地土器として東日本に広く波及することとなる。一方、近江内においても壺形土器・高坏形土器に東海系のものが組み込まれており、両地域が相互の土器組成に関



第 5 図 流出経路・パターン模式図

与しており、その上で独自の土器様相を形成していることが、他の3地域とは大きく異質の点である。

以上の様に、流入ルートとその内容の組合せにより、近江系土器・要素の流出の在り方は以下の3パターンに大別される。

隣接地域（山城・若狭・伊勢・尾張）：パターンⅠ 壺形土器・甕形土器・鉢形土器・器台形土器の主要四器種が一定量以上含まれる。

周辺地域（丹波・丹後・加賀・能登）：パターンⅡ 甕形土器・鉢形土器が1%前後含まれる。

（河内・大和）：パターンⅢ 手焙形土器を主として甕形土器・鉢形土器が若干含まれる。

パターンⅠは、物資の直接的交流と同時に、人間集団そのものの移住を背景として想定せしめるものであり、弥生時代中期以降最も頻繁に日常的交流が存在した地域であると言える。その中にあって、土器組成形成にあたって極めて相互関与が強い伊勢湾沿岸地域と在地土器群を変質させるには至らなかった山城・若狭は更に細分して行かなければならない。

パターンⅡ・Ⅲは、いずれもパターンⅠの周辺に位置するものであり、これらを経由して特定器種の形態・文様要素のみが受容された地域である。従って、在地土器との折衷形態が大半であることから、在地集団が模倣して製作したと考えられる。

パターンⅢは、現在のところ河内において顕著に認められる現象である。手焙形土器は、福岡県から群馬県にかけての広範囲において、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に認められる器種である。東日本においては古墳墳丘上からの検出例があるが、西日本においては竪穴住居内あるいは、集落端においての出土例が顕著であり、集落内祭祀の1形態と考えられている。形態的には、鉢形部分が受口状口縁鉢形土器と共通するものと、単純口縁のものに大別される。初現期においては、受口状口縁・胴部貼付突帯が基本形であると考えられる。分布密度を見ると、河内・大和・近江およびその隣接地域において最も濃厚であり、手焙形土器に対する共通認識がこれらの地域を中心として存在していたことがうかがわれ、これを創出にあたって近江系要素、特に湖南・湖東が大きく関与していたことは、形態・技法からあきらかであろう。前方後円墳を創出するにあたって山陰・吉備から諸要素を取り込んで行った現象と手焙形土器における現象は、背景的には異質のものと考えられるが、畿内中央部から単に周辺地域としてではなく、「近江」として認識されていたと想定される。従って、パターンⅢは、他の2パターンとは異質の意義を有していると言える。

## 5. おわりに

隣接地域と土器が交流することは当然の現象ではあるが、各々の背景・要因は異なっている。その中にあって、地域色を形成していく弥生時代前期以降、常に伊勢湾沿岸、特に伊勢北部との相互関連が顕著である。これは、更に東海地方以東の条痕文系文化との影響を想定させるものであり、個々の追求を進めなければならない。

本文では、近江系を取り扱いながら厳密な型式設定・編年観を提示することなく論を進めてきたため、極めて不完全なものである。従って、改めて再考を要するものであるが、それにあたって御批判・御教示を乞う次第である。

#### 参考文献

各資料については、各々の報告書から抽出させていただいたが、担当者との評価の差異は、筆者の責任であることを明記しておく。

- 佐原 真 「琵琶湖地方」(『弥生式土器集成』本編2 1968年)
- 都出比呂志 「弥生土器における地域色の性格」(『信濃』第35巻 第4号 1983年)
- 中西 常雄 「近江における甕形土器の動向 - 庄内期を中心として -」(『考古学研究』第32巻第1号 1985年)
- 岩崎 直哉 「邪馬台国出現前夜の近江 - 弥生土器から -」(『滋賀考古』創刊号 1989年)
- 国下多美樹 「近江型甕についての一試論」(『長岡京古文化論叢』1986年)
- 千喜良 淳 「弥生時代の畑ノ前遺跡」(精華町教育委員会・財団法人 古代学協会『(仮称)精華ニュータウン予定地内 遺跡発掘調査報告書』1987年)
- 石井 清司 「京都北部における近江系土器について」(『滋賀考古』創刊号 1989年)
- 野藤 和也 「美園遺跡出土の手焙形土器について」(大阪府教育委員会・財団法人 大阪文化財センター『美園』1985年)
- 石黒 立人 「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点 - 弥生後期の土器様相を中心として -」(『古代』第86号 1988年)
- 「伊勢湾地方から見た近江系土器」(財団法人 愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和62年度』1988年)
- 小竹森直子 「近江の地域色の再検討」(財団法人 滋賀県文化財保護協会『紀要』第1号 1988年)
- 「近江における弥生前期土器研究の現状」(滋賀県埋蔵文化財センター『滋賀県埋蔵文化財センター紀要1』1987年)



## 編集後記

『紀要』第2号も刊行することができた。自分の時間を犠牲にしながらも原稿を執筆してくれた職員の姿には頭の下がる思いがする。当協会はまさに職員の見えざる努力と熱意によって支えられているのだと実感した次第である。

編集者

平成元年3月

### 紀要 第2号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel (0775) 48-9780・9781

印刷 株式会社 日興商会  
尼崎市東難波町5-10-30  
Tel (06) 482-4501